



『黒田家・官兵衛ゆかりの地(姫路市東部)』をたずねて

『黒田家譜』(福岡藩黒田家公式記録)によると、姫路に生まれた黒田官兵衛(如水)は羽柴秀吉の播磨平定から中国攻め、四国・九州制圧等に至る天下統一事業に大きな役割を果たし、九州福岡藩の礎を築いた戦国武将として知られている。祖父の代から御着の小寺家に仕え、35歳で黒田姓に復した後、姫路周辺に1万石の領地を賜り、現在の宍粟市山崎町に移り住んだと言われる。今回は、祖父の重隆が備前から播磨に移り住み黒田家発展の契機となったところから、姫路市東部の祖父重隆・父職隆・叔父休夢・母明石氏・黒田家家臣を含む官兵衛ゆかりの地、秀吉による播磨平定に関わる舞台までを、播磨、福岡に伝わる文献・伝承などを手がかりに巡る。

①恒屋城跡(香寺町恒屋)姫路市指定史跡

『播磨鑑』の稿本には「天正2年恒屋光氏が置塩城主赤松則房(義祐か)に夜襲をかけ、返って白国氏に討たれた」とある。後に長水城主宇野政頼の五男(正友)が養子に入り家督を継いだ。天正8年(1580)正友は長水城(宍粟市山崎町)に籠城して羽柴秀吉に抵抗するも落城後は許されて恒屋に戻ったとする説や6代目恒屋与左衛門が筑前黒田家に300石で迎えられたという説が地元には伝わる。また『黒田家譜』には黒田長政に従って九州で戦っている恒屋氏の名前がみえる。城は南西傾斜面に畝状空堀群、後城に折のある横堀があることから、戦国時代後半まで使用されたのではないかとされる。



①恒屋城跡

②南山田城跡(山田町南山田)

南山田の中央北より標高48mの城山(一部「南山田児童公園」になっている)があり、藪の中に三段の平坦地が戦国時代の丘城の遺構を留めている。播磨後藤氏の一族である基国によって築かれたと伝わる。後藤氏はこの城構の北にある八千草村(福崎町八千種)を本拠に蔭山荘一帯に勢力をもった国人で、別所氏に仕えていたが、秀吉に叛くと、子の基次は黒田官兵衛の客分となったという。これが後藤又兵衛である。彼の足跡が記録に現れるのは秀吉の九州攻めからで、黒田家が筑前を領した後、長政との不和から牢人となり神東郡山田(山田町)に戻り、その後、大坂の陣で没したといわれている。



②南山田城跡

③増位山随願寺・有明山構居跡(白国)

有明山構居は「地藏院」とも称し、黒田職隆の弟(高友)が「安芸法印休無」(休夢)と名乗って、ここを姫路城の北の守りとしていた(『飾磨郡誌』)。天正元年(1573)8月12日、三木の別所長治800騎が増位山を襲い、寺を破却、随願寺僧侶ら200余人が嵐山(現在の景福寺山)に避難した。この時、増位山の鎮守であった白髭神社も佐土(別所町)に移された(『増位寺事跡略集記』)。和歌や茶にも秀でた休夢は後に秀吉のお伽衆として秀吉に仕えている。現地は随願寺境内から梅林を抜けて遊歩道を登ると有明の展望台に出る西の山で、山頂に東西30m、南北18mの削平地、東、南、西の三方に堀、西に土塁が残る。



③有明山構居跡

④広峯神社・御師屋敷跡(広峰山)

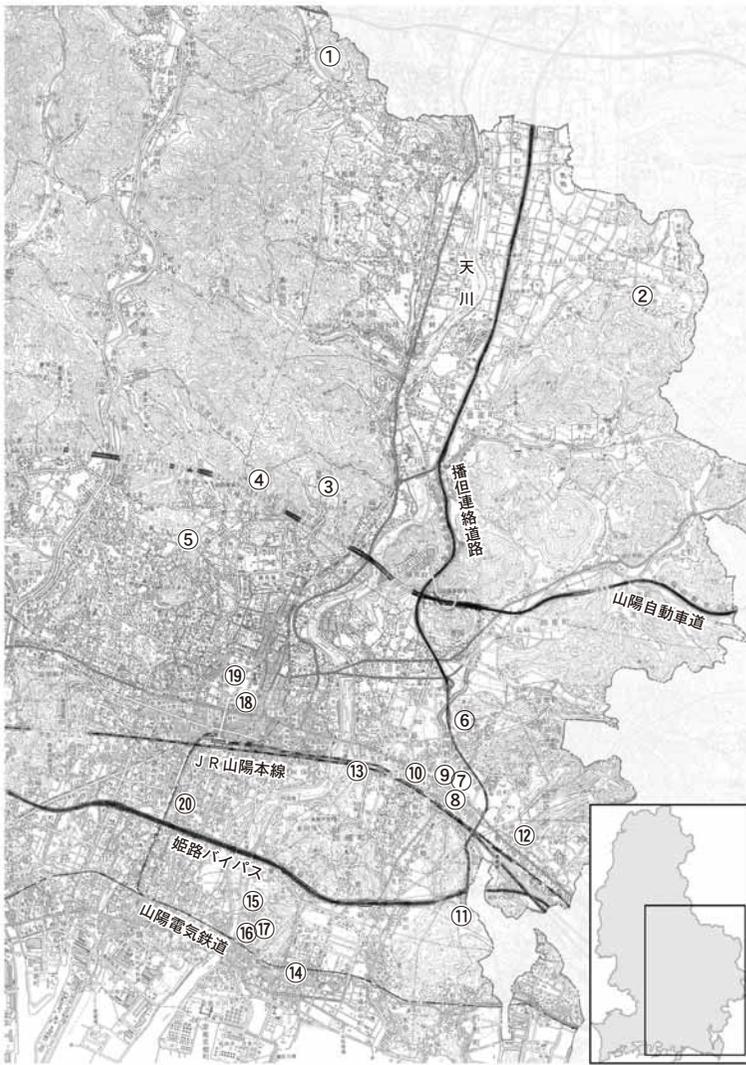
広峯神社の神主広峯氏は凡河内躬恒の子が大別当になったことに始まる。以後、鎌倉御家人、播磨国守護赤松家の盛衰、京都祇園社との本社争いに左右されながら、在地領主との結び付きによって存続。広峯神社は要害のうえ有力国人らの分家が御師(大夫)となって多くの屋敷を構えていた。『夢幻物語』によると、官兵衛の祖父重隆が広峯神社の井口大夫と会い、御師が配り歩く神符(おふだ)に付ける目葉の調合を頼まれたとあるが、これは黒田家が御師との結び付きから勢力を蓄えていったのではないかという説に基づいている。広峯神社の禰宜的存在の家に「黒田」姓が残っているが、官兵衛の黒田家との繋がりには確認できていない。現在も広峯神社の周辺で、多くの御師屋敷跡を見ることができる。



④広峯神社近くの御師屋敷跡

⑤實貞山心光寺(北平野台)

心光寺の前身は佐土村(別所町佐土)の真言宗梨原寺で、御着城主小寺氏の菩提寺であった。しかし、政隆・則職が一向宗を信奉したこと、熱心な浄土宗信者であった職隆夫人明石氏の死去を契機として、職隆が梨原寺を浄土宗寺院に改宗・改築、黒田家の菩提寺とした。心光寺縁起(『姫路考略記』)には「本尊阿弥陀仏、・牛堂山国分寺塔中(塔頭)之本尊と伝へ」とある。心光寺はその後職隆に随従して佐土村から姫路に移り、慶長13年(1608)池田輝政の町割りの際に坂田町へ移された。現在地には平成2年6月に移っている。現在、心光寺には「重隆公、重隆公内室、職隆公、職隆公内室、孝高公、友氏公」の位牌を祀った黒田家御霊屋とともに職隆廟から移築した門、灯籠等が残されている。



⑤實貞山心光寺



⑥深志野構居跡(手前「門前池」碑)



⑦御着城跡



⑧小寺大明神

⑥深志野構居跡(御国野町深志野)

『飾磨郡誌』に「播陽里翁説」として「深志野の構居は御着の枝城にして、領主は小寺孫四郎又小寺官兵衛といふ、三木の城主別所孫三郎が官兵衛の館に逆に押寄せけるといふは即ち此構居也、官兵衛は御着小寺の家臣にして一時は深志野の構居に居住するといへり、今この構居址の南に馬場の跡あり」とある。五社宮神社近辺に「門前」「構居所」という地名、裏山の竹林には深濠や石垣が現在も残っている。地元では裏山麓に家老屋敷や侍屋敷があったといわれ、別所軍を撃退したと伝わる。

⑦御着城跡(御国野町御着)

別名天川城とも茶白山城とも呼ばれる。永正16年(1519)小寺政隆が築城したと言われるが、嘉吉年間(1441~44)にはすでに構居が設けられていたとされ、明応4年(1495)には赤松氏の段銭奉行として税を集める納所が設けられていたとも伝わる。宝暦5年(1755)の「播州飾東郡御野庄御着茶白山城地絵図」(天川家所蔵)等によると、御着城は、西と南は天川を利用した二重の堀、東と北は四重の堀を廻らした長さ110間(約200m)、横80間(約145m)の城郭で、茶白山という高さ約5mの丘の上に本丸と二の丸を設け、外郭部には家中屋敷・町家を包含した総構の城であった。絵図では、旧山陽道が「今往還」として城下町内を通っているが、「旧往還」は城下の外を通っていたという。官兵衛はここで小寺政職の近習を務め、父職隆から小寺家の家老を継いでから12年目の天正7年(1579)12月、政職が信長に叛旗を翻したがため秀吉に攻められ、御着城は60年間の歴史の幕を閉じた。翌年には廃城となったため往時を偲ぶことはできないが、昭和52年(1977)から54年に二の丸を中心に行われた発掘調査で、14世紀後半から16世紀後半にかけての建物跡等の各種遺構が検出され、生活用品である土器・陶磁器・木製品等が大量に出土した。今は本丸跡に城をイメージした姫路市東出張所が建っている。

⑧小寺大明神(御国野町御着)

本丸跡を国道2号が貫く歩道橋の南に、小寺政隆・則職・政職の3代城主と天正7年(1579)の戦いで亡くなった人々を祀る小さな祠がある。毎年4月29日には、小寺家、黒田家、天川家の子孫と関係者による慰霊祭が行われている。



⑨黒田家廟所

⑨黒田家廟所(御野町御着)姫路市指定史跡

城址公園の西に、南面した木造廟屋がある。二基の五輪塔は、向かって左が官兵衛の祖父とされる黒田重隆、右が母明石氏(職隆夫人)の墓標で、高さ159.4cm、159.1cm、白色の花崗岩に法名・没年月日・氏名が彫られている。正面五文字には金箔が施され、基礎正面の法名には朱が残っている。石材が畿内近国の産石でなく、構造形式・手法も異様であることから、造立者黒田氏の本拠・福岡で製作されたものが船で運ばれ、享和2年(1802)当地で組み立てられたものとされる。重隆と明石氏はもともと佐土の心光寺に葬ってあったが、天正15年(1587)現在地に改葬したと、寛政5年(1793)御着の天川久兵衛屋敷内から発見された重隆・明石氏の墓碑(石蓋)に記されていた。廟屋廻りの玉垣等の石は竜山石で、現在の廟屋は昭和43年(1968)黒田家によって修復されたものの。

⑩牛堂山国分寺(御国野町国分寺)

「播陽里翁説」によると、天正6年(1578)4月毛利軍が上月城を囲んだ時、秀吉軍は直ちに上月城へ救援に向かった。この隙に乗じて別所軍が東から姫路城を陥れようとし、兵を率い東方から攻め寄せてきた。官兵衛は急遽姫路に引き返し国分寺に拠ってこれを撃退しようとしたが、別所軍は秀吉の助勢が来るとして国分寺に火を放ち、堂僧坊は一時に消失したという(『姫路城史』)。すぐ南に「播磨国分寺跡」「ふるさと歴史の広場」がある。



⑩牛堂山国分寺



⑪引入谷

⑪ 引入谷(的形町的形)

御着の南に標高167mの火山(樋山)がある。『飾磨郡誌』によると、天正7年(1579)秀吉が火山に在陣して御着城を攻めたが、御着城側からの猛烈な抵抗にあい一時退却して火山南東の谷に軍勢を引いたと言われている。その位置は的形町大鳥にある大鳥池の南、姫路バイパス・姫路ジャンクションを南に行った谷間「弁天池」のある辺りにあたる。

⑫西来山安養寺(別所町別所)

曹洞宗、瑞松山景福寺(景福寺前町)の末寺で、本尊は阿弥陀如来。天平9年(737)聖武天皇勅願による草創とある(寺記)。『姫路城史』に「天正7年12月、秀吉は自ら兵を率いて御着に向かい、まず別所村の安養寺及び民家に火を放ち、進んで御着南方の火山に営した」と記され、『増訂印南郡誌』には「衆徒の多くは赤松小寺の一味なれば・僧侶兵糧をご着に運び共に籠城して多く討死せり」とある。



⑫西来山安養寺



⑬八重鉾山

⑬ 八重鉾山構居跡(四郷町山脇)

御着と姫路の中間地点、北に西国街道、西北に市川の渡を眼下に見下ろす位置に八重鉾山がある。『飾磨郡誌』に「山脇の構居は八重鉾山にあった。領主は山脇六左衛門 御着小寺の家臣、山脇秀吉へ降参すべき心懸けありと官兵衛に告げければ藤兵衛(御着城主)即時に官兵衛を討手として夜討に押寄せ山脇を殺害せしむ」とある。この話は伝承の域を出るものではないが、『播磨鑑』に「山ノ脇村ノ地内ナルヘシ御屋形地とて構地アリ」とあり、北方の頂部に削平地、下方にも二ヶ所の平地が見られる。高さ8mの崖下に石罫が残され、削平地も見られるが、城郭との関係については不明である。斜面中腹に印鑑神社が鎮座し、その背後から登ることができる。

⑭ 松原八幡神社(白浜町)

天正5年(1577)羽柴秀吉が播磨の諸城を攻略した時、松原八幡神社と八正寺は秀吉方に属し、別所長治と対立したため、別所氏を支援する毛利輝元の軍船が襲来して兵火にかかったという。また、天正9年(1581)には、羽柴秀吉は松原八幡神社を城南芝原に移すよう命じたが、松原の地は由緒ある地であることを理由に移転を拒んだために秀吉の勘気に触れ、千石千貫あった社領を60石に減じられたという(『飾磨郡誌』)。地元では、この時、官兵衛が松原八幡宮のこの地での存続を懇願し、天正12年(1584)拝殿を寄進したと伝わる。また、黒田二十四騎の一人・井上九郎右衛門之房は松原出身といわれているが、これは『福岡藩仰古秘笈世二』(福岡県立図書館蔵)の「慶長七年諸役人知行割」に井上九郎右衛門を「播磨飾東郡松原郷桂(植ヶ)村人」と表示していることによる。



⑭松原八幡神社

⑮国府山城跡(妻鹿)

市川のそば、標高102.5mの甲山にあって、妻鹿城・功山城などともいう。『飾磨郡誌』には、長さ95間(172.7m)横11間(20.0m)、「城の辻」「一の段」「二の段」「局屋敷」「馬掛け」という名が記されているが、どの削平地を指すのか確認できない。もと九州の産の妻鹿孫三郎長宗が元弘の頃、赤松の幕下に属し居城したという。天正8年(1580)官兵衛が姫路城を秀吉に譲って国府山城に移り住んだというが、『黒田家譜』には出てこない。頂上から瀬戸内海、英賀城が見渡せ、姫路城、広峰、置塩、書写の山々が見えることから、姫路城の防備には絶好のロケーションであることが分かる。登り口には甲山経塚から出土した二仏の泥塔をご神体とする荒神社がある。



⑮御旅山から見た国府山城跡



⑯黒田職隆廟所

⑯黒田職隆廟所(妻鹿)姫路市指定史跡

天明3年(1783)、心光寺の僧入誉より妻鹿村に国府山城主の塚が発見されたという連絡を受け、福岡藩が現地に役人を派遣して建てた廟所である。石材の風化が激しいが、地軸正面にあった「満誉宗圓大禪定門 天正十三酉八月廿二日」と地軸左にあった「黒田」の銘の記録と『播磨古事』(福岡市博物館蔵)等の古文書から、天正13年(1585)に亡くなった官兵衛の父職隆の墓塔といわれている。以前から地元で「チクゼンさん」と呼ばれていた廟屋は昭和52年(1977)妻鹿自治会によって修築された。

⑰母里友信ゆかりの地(妻鹿)

母里友信、通称太兵衛は妻鹿の国人曾我一信の子として誕生、永禄12年(1569)官兵衛に出仕した。この年、母里氏24名が青山の合戦で討ち死にし、父一信が小寺職隆の与力的な立場であったことから、職隆の命で母方の母里氏の家名を継いだというが、理由は定かでない。『黒田節』に謡われる名槍「日本号」を福島正則から呑み獲った逸話で知られる。『福岡藩仰古秘笈世二』(慶長七年諸役人知行割)に母里太兵衛を「播磨飾東郡妻鹿村人」と記す。



⑰「母里太兵衛生誕之地」碑(元宮八幡神社)



⑱播磨国総社

⑱播磨国総社(総社本町)

『射楯兵主神社史』(射楯兵主神社史編纂委員会)によれば、永禄10年(1567)職隆が当時老朽化していた拝殿・神前御門を板葺きから瓦葺に改め再建。天正5年(1577)6月11日の「一ツ山祭」も執行したとある。また、天正8年(1580)9月官兵衛が初めて揖東郡において1万石を与えられ大名に列せられた時、黒田家の旗幟(はたじるし)を制定、播磨国総社で祈禱を受けたという。そして、天正12年(1584)官兵衛はさらに制札を与え、総社の保護に努めた。

⑲姫路城(本町)

『黒田家譜』に官兵衛の誕生を「天文15年(1546)11月29日辰の刻、姫路に産めり」と記している。その時の姫路城は「ごく小規模な砦ふうのもの以上ではなかった」(『姫路市史』第14巻)が、永禄4年(1561)職隆が姫路城を改修、「本丸、二の丸から成り、櫓を掻きあげ、石垣を畳み、塀を築き、堀を廻らし、大手門を始め幾多の門を構へた」とある(『姫路城史』)。三木城落城後、秀吉は姫路城を本拠に定め、官兵衛にその普請を命じた。その時「油断なく精を入れられるべき事」という秀吉の書状と秀吉時代のものと思われる野面積の石垣が上山里下段、菱の門東方、二の丸北方などに残っている。



⑲上山里下段の石垣



⑳「栗山町由来記」碑(栗山公園)

⑳栗山利安ゆかりの地(栗山町)

栗山利安は後に四郎右衛門と号し、天正7年(1579)有岡城(伊丹市)からの官兵衛救出、慶長5年(1600)大坂からの光圀(如水夫人)ねね姫(長政夫人)救出等で活躍した。その栗山利安が天文20年(1551)現在の栗山町で生まれたと伝わる(『飾磨郡誌』)。